

学習英文法における「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」 型表現の体系化を巡って

松田佑治

Abstract

There is a widely used expression in English—"X years old." Kunihiro (1999) indicates that the expression is highly versatile: its use varies from "I'm 16 years old" to "This temple is 500 years old" to "Our married life is nearly three years old." However, the textbooks and reference materials for senior high schools deal with the "be + Measure Phrase + Adjective" expression separately. The purpose of this paper is to propose a systematic model of this expression in Pedagogical English Grammar. Quirk *et al.* (1985) show exceptional adjectives (*e.g.* heavy) in this expression, while noting that these adjectives are grammatical if put in the comparative (*e.g.* *five pounds heavy/five pounds heavier). Yagi (1987) and Murphy (2006) provide reasons for why these adjectives cannot occur in this expression. After examining Yagi (1987) and Murphy (2006), the author supports the Disambiguation Hypothesis in the latter.*

キーワード：度量句, 「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現, 「be 動詞 + X + 普通名詞 + 形容詞」型表現, 曖昧性除去仮説 (Disambiguation Hypothesis)

1. 問題の所在

中学生にも馴染みがある英文に I'm 13 years old. がある。ここでの 13 years は、名詞句が副詞相当句として用いられている例であり、現行の (2019 年 4 月時点) の高等学校外国語科用の文部科学省検定済教科書 (以下、検定教科書と記す) を概観すると、「be 動詞 + 度量句 (Measure Phrase¹⁾) + 形容詞²⁾」型表現が散見される。

- (1) On the island, there're over 40 mountains which are more than 1,000 m (meters) high.
(*Revised LANDMARK English Communication I*, p. 104 下線は筆者による, 以下同様)
- (2) In traditional Polynesian canoes, ropes were used to tie the hulls. Surprisingly, the ropes altogether were sometimes several kilometers long.
(*PROMINENCE English Communication I*, p. 35)
- (3) These big circles are low walls made of stone. While some are a meter high, others only a few centimeters tall.
(*CROWN English Communication II New Edition*, p. 38)

度量句に関する先行研究は豊富ではあるものの、(1)-(3)のような「be動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現に関しては、現時点での学習英文法³⁾ではほとんど注意が払われておらず、検定教科書、高校生対象の学習参考書、Teacher's Manual などでも別々の言語事実として扱われている。しかし、I'm 13 years old. を鋳型にすればバリエーションに富んだ表現をすることが可能である。同様の指摘は、「多くの学生に、old を含むこの種の表現形式を、人間の年齢をうんぬんする場合にしか使おうとしない傾向が見られる。これは、実は、もっと利用範囲の大きなものである」(大沼 1968: 18)、「この形式はかなりの発展性を含んでいます」(國弘 1999: 238)、「現代英語において生産性の高い表現である」(滝沢 2015: 4) などからも窺える。

そこで、本稿は國弘 (1999: 238-242) の X years old を鋳型にした8段階のバリエーションを検証し、そのバリエーションで扱われていない言語事実や、この表現型に当てはまらない形容詞を踏まえ、学習英文法における「be動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の体系化を試みる。

2. 國弘 (1999) の X years old からの8段階のバリエーション

國弘 (1999: 238-240) では「be動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現は8段階に発展させることが可能であるとし、以下のような例を示している。

[第1段階]	I'm <u>16</u> years old.	自分の年齢に合わせて数字を変える
[第2段階]	<u>My mother</u> is 43 years old.	主語の言葉を入れ替える
[第3段階]	<u>This temple</u> is 500 years old. <u>The canned food</u> is 5 years old.	主語を人間以外の言葉に入れ替える
[第4段階]	<u>Our married life</u> is nearly three years old.	主語を物以外の言葉に入れ替える
[第5段階]	The baby is seven <u>days</u> old.	years を days に変えてみる。hours/weeks/months など同様に使える
[第6段階]	He is 90 years <u>of age</u> .	old を前置詞 + 名詞で置き換える ⁴⁾
[第7段階]	I'm 90 years <u>young</u> .	old を別の形容詞に入れ替える (冗談でこのように言う人もいる ⁵⁾)
[第8段階]	She's seven months <u>along</u> . = She's seven months <u>pregnant</u> .	形容詞の代わりに副詞 along を使う

筆者が検定教科書を概観したところ、「be動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現は「人 + be動詞 + X years old」の形で観察されることが多いために、学習者の意識には「人 + be動詞 + X years old」が固定化されていると思われる(本稿でのXは任意の数詞・数量詞を指す)。よって、國弘 (1999: 239) も「この段以降の入れ替えは、多読していないと難しいでしょう」と指摘しているように、「人 + be動詞 + X years old」を微調整するとなると、第3段階以降は難度が上がるであろう。

2.1 國弘 (1999) における第3段階の有益性

検定教科書でも、國弘 (1999) における第3段階の例が観察される。

学習英文法における「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の体系化を巡って (松田)

- (4) It is considered to be 2,000-4,000 years old. Some people say it is 7,200 years old.

(Revised LANDMARK English Communication I, p. 108)

「屋久島の縄文杉は推定樹齢 2,000 年から 4,000 年、あるいは推定樹齢 7,200 年とも言われている」(2つの it は縄文杉を指す、訳は筆者による)

滝沢直宏氏(個人談話)は、日本語では「築...年」「樹齢...年」のように言えるものの、英語では X years old で表現できるため、学習者に対して、日本語と英語が持つ性質の違いに気付かせることができると指摘する⁶⁾。筆者の高等学校での指導経験上、第3段階のような例は中学生の時点で意識させても問題はないように思える。

2.2 「主語 (inanimate) + be 動詞 + X + 普通名詞の複数形 + old」の検証

第4段階で示された例文 Our married life is nearly three years old. では、X years old の主語に、人物のような animate (有生)ではなく、inanimate (無生、非有生)である our married life が生起している。また、第5段階 The baby is seven days old. では、X years old の years が days に置き換えられている。本節では、國弘(1999: 238-240)でいえば第5段階に近い以下の表現を考える(ただし、ここでの主語は inanimate (無生、非有生)である点に注意されたい)。

- (5) The J. League season is only six games old, but already the early front-runners have hinted at their championship potential with a series of convincing performances.

(The Japan Times, 2016/4/14, p. 12, Andrew Mckirdy 氏執筆)

- (6) This studying-language abroad program is six semesters old. (英語母語話者教員提供)

(5)(6)は「主語 (inanimate) + be 動詞 + X + 普通名詞の複数形 + old」の例であり、下線部はそれぞれ「Jリーグが開幕してまだ第6節(であるが)...」「この語学留学プログラムは6学期目である」の意である。しかし、英語母語話者教員によっても、これらは容認可能性の判断が分かれるようである。COCAを見てみると、X games old は5例該当(すべて newspaper の例で、対応する主語もすべて season)したもの、X semesters old の該当例はない。こういった事情を考慮し、國弘(1999: 238-240)における8段階のバリエーションにおいて、「主語 (inanimate) + be 動詞 + X + 普通名詞の複数形 + old」を現時点の段階では取り入れないものとしておく。

2.3 第8段階「be 動詞 + X months + pregnant」(妊娠 X か月)の表現法

國弘(1999: 239)が示した第8段階 be 動詞 + X months + pregnant は、大沼(1968: 20)、八木(1987: 27)、滝沢(2009: 59; 2015: 4; 2017)などでも扱われている。以下の例で確認しよう。

- (7) She is six months pregnant. 彼女は妊娠6か月だ (G⁵, s.v. pregnant)

- (8) She was four months pregnant with me. (COCA 2017: Fiction)
彼女は私を妊娠して4か月だった

(8) のように前置詞 *with* と共に用いれば, *with [twins / her son / her boyfriend's child / her first child]* と表現することも可能である。なお, *pregnant* の直前の度量句は, *X weeks/months* のような期間を示すような度量句に限られる点に注意されたい⁷⁾。そもそも, *pregnant* は *old/young, high/low, fast/slow, long/short, tall/short, deep/shallow* のような尺度を持ち, かつ対の意味概念を持つようなタイプの形容詞ではない。したがって, (7) (8) のような英文に出会わない限り, 妊娠 *X* か月を表す表現は学習者が容易く思いつくような表現ではないと思われる。

3. 「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現と「be 動詞 + X + 普通名詞 + 形容詞」型表現

3.1 「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現

紙幅の制約上多くは提示できないが, 「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現を概観してみる。

[長さ (距離)]

- (9) It measures 6 meters long, 2 meters wide and 2 meters tall. (國弘 1999: 240)
- (10) The board is 1 inch thick. その板は 1 インチの厚さです (*W²*, s.v. *thick*)
- (11) Cartersville is 45 miles north of Atlanta on I-75. (COCA 1991: Newspaper)
- (12) a town (which is) five miles off. 5 マイル離れたところにある町 (*G⁵*, s.v. *off*)
- (13) The island is 20 miles around. その島の周囲は二十マイルです (國弘 1999: 241)
- (14) The pond is five yards across[wide]. その池は直径が 5 ヤードだ (*G⁵*, s.v. *across*)

[時間 (年齢)]

- (15) I was twenty minutes late for school this morning. 今朝学校に 20 分遅刻した (*G⁵*, s.v. *late*)
- (16) My watch is two minutes fast. 私の時計は 2 分進んでいる (*G⁵*, s.v. *fast*)
- (17) The clock is 5 minutes slow. 時計は 5 分遅れている (*G⁵*, s.v. *slow*)
- (18) The bus was five minutes early. バスは 5 分早く着いた (*W²*, s.v. *early*)
- (19) My sister and I are two years apart. 姉と私は 2 歳離れている (*G⁵*, s.v. *apart*)
- (20) We are light years ahead of where we used to be in terms of ecology. 私たちはエコロジーの点で以前よりも大いに進んでいる (*G⁵*, s.v. *ahead*)
- (21) You are 15 years behind in your advice. あなたのアドバイスは十五年遅れている (國弘 1999: 241)

なお, *north, off, around* などの語は辞書的には副詞扱いではあるが, それらは直前の副詞相当句である度量句で修飾されているため, 本稿ではそれらの語を一括りに形容詞として扱っている。

3.2 「be 動詞 + X + 普通名詞 + 形容詞」型表現

では, 度量句の代わりに「X + 普通名詞」が用いられている以下の表現を検討しよう。

学習英文法における「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の体系化を巡って (松田)

- (22) The building is ten stories high. そのビルは 10 階建てです (G⁵, s.v. *story*)
(23) My office is one floor down. 私の事務所は一階下です (G⁵, s.v. *down*)
(24) The garage is two cars wide but will hold a pair of lift racks for two more.
(COCA 2000: Spoken)
(25) I was three strokes ahead of her. 私は三打差で彼女をリードしてた (國弘 1999: 241)
(26) It is one key stroke away. キーを一つ押すだけで、出来ます⁸⁾ (ibid.: 242)

(24) のように具象名詞 *car* を生起させ、「車 2 台分の広さ」という「... 分の, ... 分だけ」にあたる表現を度量句の代わりに用いることは、比較的難度が上がると思われる。

3.3 「be 動詞 + X + 普通名詞 (出来事・行事・人 ...) + ago」型表現

本節では、先行研究で扱われていない「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現で有益だと思われる *ago* を取り上げる。頻度から言えば、*ago* の直前には *hour / month / year* のような時間を表す名詞が圧倒的に生起すると思われる。しかし、G⁵ (s.v. *ago*) によると、*two birthdays [elections] ago* (2 つ前の誕生日 [選挙] の時に)、*three summers ago* (3 年目の夏)、*two pages[chapters] ago* (2 ページ [章] 前に) のように、*ago* の直前には出来事・季節などを示す語と用いることが記述されている⁹⁾。また、「X + 具体物 + ago」, 「X + 人 + ago」のような例も観察される。

- (27) Two smartphones ago I had an iPhone 4S.
(<https://www.winnipegfreepress.com/local/wired-203967711.html>, 2019/4/27 確認)
(28) John was three boyfriends ago. (英語母語話者教員提供)

英語母語話者教員らは、このような表現を「ユーモアを含んだ言い方」「クリエイティブな言い方」と指摘し、おおむね容認可能であるという。よって、本稿の主眼である「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現に取り入れても問題は生じないように思える。

4. 「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現に当てはまらない形容詞

4.1 検定教科書の例から窺える「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の例外となる形容詞

まずは、*weigh* が新出単語として扱われている以下の例を考えよう。

- (29) You can see one of nature's number ones in Thailand. A very small bat lives there. It weighs only 2 grams and it's only 2 centimeters long. It's shorter than your thumb. It is perhaps the smallest mammal in the world.
(*Compass English Communication I Revised*, p. 20, 下線太字筆者, 以下 (32) まで同様)
(30) Ashura, for instance, is 153 centimeters tall but weighs only about 15 kilograms.
(*CROWN English Communication II New Edition*, p. 88)

(29) (30) は and で等位接続されているにもかかわらず、一方を「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現で表現しているのに対し、もう一方を形容詞 heavy ではなく動詞 weigh を使って体重を表現している。学校では詳細に扱う機会はないように思えるものの、形容詞 heavy がなぜ「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現に当てはまらないのかと、高校生が疑問に思っても不思議ではない。ここでは、「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の知識と、heavy が「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の例外の形容詞であるために一般動詞 weigh を用いなければならない、という2つの知識が必要なのである。

なお、ここで問題にしている言語事実は、英字新聞でも観察される。以下の例を見てみよう。

(31) Each shield is 110 cm long, 56 cm wide and 2.7 cm thick, and **weighs** 5 kg.

(*The Japan Times*, 2014/10/8, p. 2, 石田業保氏の問題提起による)

(32) Titled “Throne,” the sculpture is made with fiber-reinforced plastic and stainless steel and is coated with gold foil. **Measuring** 10.4 meters high, 4.8 meters wide, 3.3 meters deep and **weighing** 3 tons, the piece was inspired by festival floats, Nawa said, and it curiously includes a seat.

(*The Japan News*, 2018/11/10, p. 8)

(31) は「長さ」「幅」「厚さ」「重さ」が and で等位接続されている例である。また、(32) はアーティスト・名和晃平氏がフランス・パリのルーヴル美術館にあるガラスのピラミッド内で新作の金の巨大彫刻を披露したという文脈である。(32) は Measuring ... と分詞構文の形で表現している一方、「重さ」だけを ... and weighing ... のように別にして表現している点が重要である。

4.2 heavy が「be + 度量句 + 形容詞」型表現の例外となる理由

大沼 (1968: 19), Quirk *et al.* (1985: 471), 八木 (1987: 28-29) らは、形容詞 heavy は「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現で用いることはできないと指摘している。大沼 (1968: 19) と Quirk *et al.* (1985: 471) の記述を確認しよう。

一種の類推作用に由来するのか、学生が、ときに、「僕は体重 150 ポンドです」のつもりで *I am one hundred and fifty pounds heavy (*or in weight*). などと言ったりする。I weigh (*or am*) one (*or a*) hundred and fifty (pounds). / My weight is 150 (pounds). などに代える必要がある。大沼 (1968: 19)

However, such adjectives are used in this way only in *how*-questions, not with noun phrases of measure:

A: *How heavy* is your suitcase? B: *It is only 20 kilos heavy.

Quirk *et al.* (1985: 471)

ただし、Quirk *et al.* (1985: 471) の例は、heavy の箇所を in weight に変えれば容認可能となる。

(33) B: It is only 20 kilos in weight.

なお、ある英語母語話者教員から、モノが主語の場合は in weight でも可能だが、人の場合はやはり一般動詞 weigh を用いる方が自然であるという意見を得られた。

次に、形容詞 heavy が「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の例外である理由について検証しよう。まずは、八木 (1987: 28) の注釈を検証してみる。

*John is seventy kilos heavy に対し John weighs seventy kilos がある。同様に、*the book is six dollars dear/expensive に対し、the book costs six dollars がある。一般に、ある尺度について一般動詞 + 度量句の表現が存在する場合、対応する be + [度量句 + 形容詞] の表現は存在しないと言える。これは、語彙的な表現の存在が統語的表現を阻止することの一例かも知れない。[...]

つまり、八木 (1987: 28) は weigh という一般動詞が「be 動詞 + 度量句 + heavy」を阻止 (blocking) しているために、「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現において形容詞 heavy は不可であるとの見解を述べている。この見解は一見説得力があるように思われる。しかし、「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の例外となる形容詞は heavy や expensive だけではない。Schwarzschild (2005) や Murphy (2006) は、heavy/expensive 以外の形容詞を問題提起している。

- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| (34) a. *6 lbs heavy/light | j. *2 percentage points likely |
| b. *30° hot/cold/warm | k. *2 degrees acute |
| c. *80 mph fast/slow | l. *it takes 2 days long |
| d. *\$5 cheap/expensive | m. *200 pounds fat/thin |
| e. *2 inches big/small | n. *The winds are 25 mph strong. |
| f. *3 shades dark/light | o. *30 miles close/far/near |
| g. *50 decibels loud/soft | p. *600 watts powerful |
| h. *\$10 ⁶ rich/poor | q. *20 points popular |
| i. *20 IQ points intelligent/stupid | r. *20pts well/bad on the exam |

Schwarzschild (2005: 210)

(35) Q How big is that flower?

A1 # It is 8 centimetres big

A2 It is 8 centimetres (wide)

Murphy (2006: 88-89)

(36) *40 square meters large

Murphy (1997)

上記の例を考慮すると、weigh や cost のような一般動詞は、「一般動詞 + 度量句」という型が存在するために、heavy や expensive は「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現を取らないという八木 (1987: 28) の見解では説明がつかない反例が数多く存在してしまう。例えば (36) では、筆者の知る限り、これといった「一般動詞 + 度量句」型表現が見当たらない。通例、以下のように

表現するからである。

(36') This floor space of this house is 40 square meters.

この家の床面積は40平方メートルある

次に, Murphy (2006: 89) を検証する。Murphy (2006: 89) は, 以下のような曖昧性除去仮説 (Disambiguation Hypothesis) を提示している。

Disambiguation Hypothesis MP+Adj constructions are allowable in those cases in which the measure noun is ambiguous in that it can be used in measuring a number of different scales, associated with different adjectives.

この仮説に従うと, (36') は square meters で既に面積が明示されているために, 曖昧性が除去されている。そのため, large を加えると冗長になってしまう。また, Murphy (2006: 89) は, 自身の仮説を支持する根拠として以下の例を示している。

(37) a. 3 months **old / long**

b. 3 meters **long / tall / thick / wide / deep / broad / high** Murphy (2006: 82)

3 months もしくは 3 meters のみでは曖昧であるものの, 3 months の直後に old, long を置く。そして, 3 meters の直後に long, tall, thick, etc. を置くと曖昧性を排除できる。さらに, 本章の主眼である, なぜ *20 kilos heavy が容認されないのかという理由も, kilos が質量を明示し, 既に曖昧性が除去されているため, heavy を加えると冗長になる, と考えれば説明がつく。

以上を考慮すると, Murphy (2006: 89) の仮説の方が支持できる。なお, 等位接続する際に, 質量・長さ・年齢・時間・金額などの表現の仕方が言語間で異なると思われる。その調査は今後の課題とする。

4.3 「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の例外の例外

4.1 節, 4.2 節では, heavy や expensive などの形容詞は「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の例外事項であると確認した。しかし, これらの形容詞を完全に例外として切り捨ててしまうと, 問題が生じる。というのは, Quirk *et al.* (1985: 472) では, *He is five pounds heavy. が不可である一方, He is five pounds too heavy. / He is too heavy by five pounds. / He is five pounds heavier than John is. は可であると注釈しているからである。八木 (1987: 28-29) も同様の指摘をしており, two years younger/*young と加えている。さらに, Schwarzschild (2005: 210) も, (34)-(36) は形容詞を比較級にすることで容認可能になると指摘する。約言すれば, heavy や expensive などの形容詞は, 比較級にすると「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現で用いることができるのである¹⁰⁾。

5. 学習英文法における「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の体系化

これまでの議論を踏まえて、「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現を体系化したものを、次の表 1 にまとめる¹¹⁾。

表 1. 「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現で用いることのできる形容詞

主語 (NP)	be 動詞	度量句 (MP)	形容詞 (原則比較級にできる)
animate / inanimate	be	MP (時間)	old / early / late / fast / slow
		MP (場合によっては X + 普通名詞も生起)	high / long / tall / thick / wide / broad / deep ¹²⁾ / short (of) / distant 形容詞 (原則比較級にできない)
animate		MP (時間)	pregnant
inanimate			overdue
animate / inanimate		MP (質量)	overweight
animate / inanimate		MP (場合によっては X + 普通名詞も生起)	形容詞 (原則比較級にできない)
			down / north (方角など) / off / around / across / away / back / apart / ahead (of) / behind / ago / later / above / below
		MP	原則この型に現れることができない形容詞 (比較級にすれば可能) young / heavy / light / expensive / cheap / hot / cold / warm / big / small / short / low / narrow / new / shallow / large / dark / loud / soft / rich / poor / low / intelligent / stupid / likely / acute / fat / thin / close / far / near / powerful / popular / well / good / bad / saturated

表 1 には、紙幅の制約上本稿で取り上げることができなかった形容詞も含まれている。なお、現時点では不備がある可能性は否定できないものの、表 1 は学習英文法における「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の本質を概ね押さえているように思える¹³⁾。以下の例を見られたい。

(38) Our principal is **three years younger than** my grandfather.

私たちの校長先生は私の祖父より 3 歳年下だ。

(*Vision Quest English Expression II Ace*, p. 58; *Vision Quest English Expression II Hope*, p. 58)

ここでは、*Our principal is three years young が (冗談である場合を除けば) 非文であるという知識と、young を比較級にして用いれば容認可能であるという 2 つの知識が必要であろう。難度は高いものの、表 1 を用いれば、(38) のような比較級を用いた差を表す表現に触れる際、教員側にとっても説明しやすいと思われる。

なお、「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現に現れることのできる形容詞でも、(34c) (34l) のように、意味が冗長になる場合には、容認不可となることに注意されたい。

6. 結語

本稿では、学習英文法において今もなお「人 + be 動詞 + X years old」が固定化され、かつ「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現が別々の言語事実として体系化されていないことを問題提起した。そして、國弘（1999: 238-240）を基に、「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現と「be 動詞 + X + 普通名詞 + 形容詞」型表現を検証し、さらに現代英語において生産性が高い有益な用法を加えた。その一方で、Quirk *et al.*（1985: 471）などの記述を引用し、「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型において用いることができない形容詞を指摘した。そして、なぜ形容詞 heavy などがこの型に当てはまらないのかを検証し、筆者は Murphy（2006: 89）の曖昧性除去仮説を支持した。

注

* 本稿は、六甲英語学研究会 2019 年度 3 月例会（2019 年 3 月 17 日、於：神戸市三宮の勤労会館）において「「be 動詞 + 数量表現 + 形容詞」型とその例外」という題目で研究発表したものに大幅に修正を施して、立命館大学国際言語文化研究所主催シンポジウム「学習英文法を巡って」（2019 年 3 月 25 日、於：立命館大学）において研究発表したものに修正を施したものである。両会場からコメントをしてくださった先生方に心から御礼を申し上げる。また、立命館大学言語教育センターの英語母語話者教員の方々、および立命館大学言語教育情報研究科 David Coulson 教授には感謝の意を示したい。さらに、西脇幸太氏からは原稿の段階で細部にわたるコメントを頂戴した。なお、石田葉保氏による問題提起が、本稿を執筆する上で重要な示唆を与えていただいたことは特記しておきたい。もちろん、本稿に残された不備はすべて筆者の責任である。加えて、本稿は 2018 年度国際言語文化研究所萌芽のプロジェクト研究助成プログラム「最新の英語学研究と現行の学習英文法の乖離を埋めるための基礎的研究」（代表：滝沢直宏）の助成を受けている。

- 1) 本稿での度量句とは、厳密には Jackendoff (1977: 137-138) が示している例のように、形容詞句 (Adjective Phrases) や前置詞句 (Prepositional Phrases) を直前で修飾する名詞句を指す。また、本稿では、度量句に含まれる基本単位に国際単位系 (SI) 以外の単位 (例: リットル L) も想定し、論じている。
- 2) ここでいう形容詞とは、old/young, heavy/light, fast/slow などの対となる尺度を表す形容詞で、かつ無標 (unmarked) の形容詞を指す。marked と unmarked の違いについては、Swan (2016: 189) が以下の例で比較的分かりやすい説明をしている。

She's very tall and he's very short. (marked)

Exactly how tall are they both? (unmarked) (NOT *Exactly how short ...*)

- 3) 本稿でいう学習英文法とは、大津 (編) (2012: 3) において記述されているような「教育と関連した英文法」を指す。
- 4) He is 90 years of age. は、He is 90 years old. の意である。なお、本稿では「be 動詞 + 度量句 + 前置詞 + 名詞 (句)」を紙幅の制約上扱っていない。
- 5) Quirk *et al.* (1985: 470) も同様の指摘をしており、“We will not say (except jokingly, as a compliment): *Mr. Jespersen is 75 years young.” と記述している。
- 6) 難度は上がるが、以下のような例も英作文上あるいは英文読解上興味深い。

(i) Less than a week old, the shelter has assumed the squalor of an overwhelmed refugee camp, and the rhythms of enforced idleness have taken hold.

(*The New York Times International Edition*, 2018/11/20, p. 1)

下線部は「(シェルターが) 建てられてから一週間もしないうちに」の意である。

学習英文法における「be 動詞 + 度量句 + 形容詞」型表現の体系化を巡って (松田)

また、以下の「(a/an/the) + X-year-old + 名詞 (inanimate)」型表現も英作文上有益であろう。

- (ii) Who killed Napoleon? It's a 180-year-old mystery.
(*The Daily Yomiuri*, 2001/7/1, p. 12, 滝沢直宏氏提供)
- (iii) [...] because he was a longstanding admirer of the nearly 2,000 year-old Roman monument, with its high dome and central opening that let in the sun and the rain and made the visitor feel one with nature.
(*The New York Times International Edition*, 2019/4/29, p. 2, he は安藤忠雄氏を指す)
- (iv) Stolen 400-year-old Bible found in Netherlands
(*The New York Times International Edition*, 2019/5/2, p. 18, 見出し)

他にも、名詞 (inanimate) の位置には institution (機関), tool (道具), skull (頭蓋骨) など幅広く生起できる。

7) *W*^a (s.v. *pregnant*) が指摘するように、日米で妊娠月数の数え方が異なる点に注意されたい。

8) (26) の統語分析に関しては、松山 (2011, 2013) を参照されたい。

9) *W*^a (s.v. *ago*) も同様の旨の記述が観られる。なお、滝沢直宏氏 (個人談話) は many administrations/elections ago のように ago の直前に「many + 出来事」が生起する例は必ずしも直接日本語に対応せず、意外な難しさがあると指摘する。さらに、近藤雪絵氏 (個人談話) から、ago ではないが later にも campaign のような出来事を示す普通名詞が生起する例があるという旨の指摘を受け、COCA を調査したところ、以下のような例を得た。

- (v) Hunter took the job in July 1996 and, two summers later, led players through his first CBA with Stern and the owners.
(COCA 2011: Newspaper)

10) よって、例外となる形容詞を比較級にすれば、以下のような等位接続も可能となる。

- (vi) To put his size in perspective. Enho is about 50 kg lighter and 15 cm shorter, on average, than most of the opponents he will face this month.
(*The Japan Times*, 2019/5/2, p. 10)

11) 八木 (1987: 27-28) も同様に「度量句による修飾を受けられる形容詞はごく限られる」として、broad / deep / distant / high / long / old / tall / thick / wide / (7 months) pregnant / (5000 men) strong (人員 5000 名の) / over-weight / 比較級を含む意味での early / late / short / (時計が) fast / slow の例を示しており、表 1 を作成する上で参考にした。

12) 形容詞 deep に関しては、数詞が生起しないものの、以下のような表現がある。

- (vii) The snow was knee deep. 雪はひざまでの深さがあった。
(*G*⁵, s.v. *deep*)

13) 形容詞 strong を用いた「総勢 1,000 名の軍隊」という意の表現もある。

- (viii) The army is *(1000 men) strong. Schwarzschild (2005: 219)

しかし、ここでは 1,000 men が義務的であるため、本稿の趣旨とは異なるものとしている。

参考文献

- 市川繁次郎. 1968. 『数と量 英語の語法 表現篇 1』東京: 研究社.
- Jackendoff, R. 1977. *X'-Syntax: A Study of Phrase Structure*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 金子稔. 1997. 『現代英語語法ノート II』東京: 教育出版.
- 國弘正雄. 1999. 『國弘流 英語の話しかた』東京: たちばな出版.
- 松山哲也. 2008. 「“Ten minutes into the walk” という構文の語彙概念構造」『鹿児島県立短期大学紀要』59, 31-44.
- 松山哲也. 2011. 「MP away from V-ing 構文の意味的多様性」『英語語法文法研究』18, 126-142.
- 松山哲也. 2013. 「構文的イディオムとしての MP away from」『和歌山大学教育学部紀要. 人文科学』63,

85-92.

- Murphy, M. L. 1997. Why adjectives occur (or don't) in measure phrases. In *Annual Meeting of the Linguistic Society of America*, Chicago, January, 2-5.
- Murphy, M. L. 2006. Semantic, pragmatic and lexical aspects of the measure phrase+ adjective construction. *Acta Linguistica Hafniensia*, 38 (1), 78-100.
- 大沼雅彦. 1968. 『性質・状態の言い方 / 比較表現 英語の語法 表現篇 3』 東京: 研究社.
- 大津由紀雄 (編) 2012. 『学習英文法を見直したい』 東京: 研究社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Schwarzschild, R. 2005. Measure phrases as modifiers of adjectives. *Recherches linguistiques de Vincennes*, (34), 207-228.
- Swan, M. 2016. *Practical English Usage*. Fourth Edition. Oxford: Oxford University Press.
- 滝沢直宏. 2009. 「学問研究に資する英語教育に向けて」『名古屋高等教育研究』9: 51-63.
- 滝沢直宏. 2015. 『平易な語の有効活用: 英文法と英語表現の接点を探る』 岐阜県英語の教え方研究会 2015年1月例会 配布資料.
- 滝沢直宏. 2017. 「変えにくい「英文法」とその微修正」『電子情報通信学会技術研究報告 (思考と言語)』117, 218: 31-36.
- 八木孝夫. 1987. 『程度表現と比較構造』 (新英文法選書 第7巻) 東京: 大修館書店.

辞書

- 井上永幸・赤野一郎 (編). 2019. 『ウィズダム英和辞典 第4版』 東京: 三省堂. [W⁴と略記]
- 南出康世 (編). 2014. 『ジーニアス英和辞典 第5版』 東京: 大修館書店. [G⁵と略記]

コーパス

- The Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>) [COCA と略記]